

アメリカ雑貨で海外への興味を持った

私は仙台で専門学校を卒業して、アメリカの古着や雑貨を扱うお店に就職しました。そこで働くうち、店の輸入商品や、海外に住んだことがある同僚に感化されて、私も海外に出たい、海外に住みたい、と思うようになりました。21歳のときです。そこで、そのお店をやめ、軽井沢や山形のリゾートホテルで1年半ほど働いて、海外へ行くための貯金をしました。実はその時にスキー場で託児所の係をした経験が、子供向けの英語の先生になろう、と後から思うキッカケになりました。

2006年にワーホリでオーストラリアへ。まずブリスベンで3ヶ月ほど語学学校へ通い、その後、タスマニアに一人で行ってニンジン工場で働きました。畑で収穫されたニンジンの仕分けをしてパッキングしたり、それを詰めるダンボールの箱を組み立てたりといった仕事内容でした。そこではいろいろな国から来たいろいろな人が働いていましたが、皆私と同じようにオーストラリアに長く滞在したい、という希望を持っていましたから、皆といい友達になれました。今でも連絡を取り合っている人が何人かいます。なかにはオーストラリアの永住権を無事に取得して住んでいる人もいます。それから、ファームでエクステンジも体験しました。



南半球で再び新しいことに挑戦

1年間のワーホリを終えて帰国しても、海外に住みたい、いろいろな国の人と知り合いたい、という気持ちはおさまりませんでした。

そこで、しばらく東京に住んで、また海外へ行く資金を貯めようと思いました。インターネットで国際交流協会の外国人向けのシェアハウスが、空き部屋を日本人にも貸してくれる情報を見つけ、そこに引越し。一軒家を何人かでシェアする、こちらのような賃貸スタイルでした。その後、東京駅でセールスの仕事に就き、3年いました。

さて、再び南半球の国に行こうという段階になって、何をしようかを考えました。単に英語を勉強するだけでなく、何か別の目的を持ちたかったのです。いろいろと調べるうちに、ここのJ-Shine児童英語の認定コースを見つけました。スキー場で子供と接する仕事はとても楽しい経験でしたから、迷わずこれに決めました。日本の英会話学校でJ-SHINE資格コースをとると週2回で1年間かかります。でもこのコースはフルタイムで5週間、というのが魅力的でした。

極端な評価が要点をつかむのに役立った

Teaching English to Young Learners TESOL
児童英語のコースはとてもハードでした。

まず最初に先生が、トピックごとに教える教授方法を講義します。トピックは、リスニング、リーディング、ライティング、ゲームなどで、各トピックをどうやって子供たちに教えるかのセオリーです。このコースに入るには英語のレベルが最低Intermediateであることが条件ですが、Upper Intermediateの私も先生の言っていることが時々分からないことがありました。大切なところを聞き漏らさないようにずっと神経を集中していなければなりませんでしたが大変でした。

そしてセオリーを理解したら、そのトピックに合ったレッスンプランを作り、使う教材を作るプロジェクトです。それが宿題となり、翌日には朝からそれをクラス皆の前で発表しなければなりません。

私は専門学校で誌面や広告作りなどクリエイティブなことを学びましたから、フラッシュカードやストーリーブックなどの教材を作ることは自体はやさしくて楽しかったのですが、作り始める前のアイデアを出すのに苦労しました。夜9時までがんばって、それでも間に合わなくて、次の日朝早く登校することもありました。



毎日のプレゼンは、ちょっと的外れだったりすると発表の途中でやめさせられることも。その代わりに、良い点は大変ほめてくれます。でもそれが結果的には分かりやすく、教授法の要点をつかむのに役立ったと思います。

どうしてもプレゼンのアイデアが浮かばない時はもちろん先生が助けてくれました。

最後の資格試験のプレゼンは、東北地方の大震災の直後だったので、数日間、夜も眠れず、とても辛かったです。先生を含め、周囲の人が気にかけてくれて励ましてくれたので、何とか乗り切ることが出来ました。達成感があるコースです。



日本の子供たちに英語で教える

コースは終了して、目的だった児童英語の認定資格もとりましたが、もう少し長くNZにいるつもりです。子供に接触する機会を多くしたいです。日本人補習学校へボランティアで行って、この間はホームステイの家の子供のパーティで、私が創った絵本を読んで聞かせました。

日本に帰ったら、英会話教室で幼児に英語を教えたいです。このコースでは、ネイティブの子供たちに教える、という設定の教え方を学びましたが、日本の子供たちにも日本語をほとんど使わないで教えることが出来るはずだと思います。J-Shineに登録をして、実際に教える経験を重ねながら、そのあたりをもっと学び、ゆくゆくはトレーナーコースにも参加したいです。



(このインタビューは、NZのローカル雑誌E CUBEに掲載されたインタビュー記事からの抜粋となります)